令和六年度　推薦入学試験問題

国語

◎　指示があるまで開かないこと

北海道社会事業協会　帯広看護専門学校

問題一

「サルの研究をしています」というと、「人間とサルはどこが決定的に違うのですか」という質問を、よく受ける。最近は、遺伝学の研究が急速に進歩して、遺伝情報のＤＮＡ配列というのが、一〇〇％解読されてきている。それによると、人間とチンパンジーのＤＮＡは九八・八％が同じであるという。［　A　］遺伝の研究者なら、「人間といっても内実(ア)はサルとほとんど同じようなものです」①と考えるかもしれないし、それは誤りではない。

あるいは人間は二足で歩行する点で固有であるという説もある。毛がほとんどはえてなくて、裸であるという主張も一時、流行した。

けれど私は、心理・行動の研究者なので、外見や形態やＤＮＡはひとまずおいた上で、心のあり方についての差異に自(イ)ずから関心がいってしまう。

こうして考えてみると、能力というものそのものについては、人間以外の霊長類でも、以前に考えられていた以上に高等で複雑な内容を認識したり、［　B　］自分で遂行できることがわかってきている。だからその限りにおいて、両者に決定的な相違は、見つけられそうにない。

しかしながら、その高次の認識や行動の遂行を可能にする学習を成り立たせる「ばね」が、根本的に違う。学習は大きく、「してはいけない」ことを学ぶ、つまり禁止のものと、「した方がよい」ことを学ぶ、つまり促進のものに二分されるが、そのうち後者つまり学術用語でいうところの「報酬（reward）」と呼ばれるものが、質的に大きく異なるのである。他方、禁止の方は基本的に変わらない。つまり自分にとって脅威や有害なことが起きると、それは罰として作用する。ここでいう報酬とは、学習上の励みにほかならない。正のフィードバックだ。励みがあると、(1)ますますその直前の行動や認知を行うようになる。それが人間と、人間以外の動物では大きく異なる。

人間以外の動物では、報酬はおおよその場合において、水を含めた食物である。食物は、生命をイジ(a)していく上で、もっとも大切な要素であるからだ。ところが人間ともなると、そうではなくなる。機会があれば、人間の子どもをしばらくのあいだナガ(b)めてみればわかるだろう。

子どもにとって成長していく過程での最大の学習は何かといえば、それは「ことば」をマスターしていくことのように思われる。

それというのも、満三歳になった頃から小学校に入るまでのあいだに、彼らはヘイキン(c)して毎日、一五語くらいのペースで新しい単語を習得していくことが明らかにされてきているからである。それぐらいのテンポで学習しないと、成人の用いるようなおびただしい語彙数には一〇〇年かけてもたどり着かない勘定(ウ)になってしまうのだ。

これは、とてつもないスピードというしかないだろう。おそらく子どもは、涙ぐましい努力を払ってことばを身につけようとしているに違いない。

［　C　］この学習の過程で、その涙ぐましい努力を支えるものは何なのかといえば、それは決して食物や水ではないのである。

たとえ努力しなかったところで、人間の子どもはふつう、三度三度の食事は与えられることが多い。かといって、子どもの報酬は、特別に用意された大好物のケーキやアイスではないし、ジュースでもない。よく頑張ったからオモチャを買ってもらえることでもない。

では何が原動力となっているかというと、新しい単語を口にしたとき「わぁ、〇〇ちゃん、もうそんなことばを言えるようになったのね！」というのに代表される、周囲の反応なのである。

つまり、子どもを取り巻いている周囲の大人たちが振り向いてくれること、感嘆して驚きのまなざしを投げかけてくれることが、最大最高の［　I　］として作用しているのだ。

私はサルの研究に長い間たずさわってきたからよくわかるのだが、生物としての同じ仲間である他の存在が、自

分自身に注意を払ってくれることが心地よい、だから学習にせっせと励むというのは、人間以外の霊長類ではまずあり得ない現象なのだ。一方、その感性が人間では［　Ⅱ　］として備わった状態で、生まれてくる。

当たり前の話であるけれども、私たちは学習することなしには言語を操ることなど不可能である。そして人間以外の動物は、言語を操ることができない。その点において、人間は他の動物から卓越[エ]した生物であるということにも、疑問のヨチ[d]はない。

［　D　］、どういう言語（日本語、英語、フランス語、……）を身につけていくかにかかわらず、言語を学ぶにあたって、子どもが周囲の仲間に注目されることを励みにする点は、万国共通である。またそのためのシシツ[e]があらかじめ人間に、遺伝的に無条件に設定されているということも、事実なのである。

そういう意味では、社会的に注意を払われることに心地よさを感じる習性は、人間に生まれながらに備わった、いわば「業」のようなものと書くことも可能だろう。

事実、人間は終生、その呪縛から逃れることはできない。

それは善いとか悪いとかいう、［　Ⅲ　］性質のものではない。どうしようもなく「そう」であり、死ぬまでそれと付き合わねばならない宿命にあるといってよい。

そしてその出発点となるのが、他者の表情のなかの「笑い」という人間独特の表出なのだ。生まれたばかりのころの私たちを想像してみよう。周りは混乱にあふれている。その時、自分に笑いかけてくる対象、それに注目し、それにならうことで人間は身の安全と、順調な発達へのスタートを切るのだ。

学習の励みとなる社会的賞賛の核となるのが、この表情であることも改めて指摘する必要はないだろう。(2)ここから人間は、他の動物では不可能な高次の学習が始まる。そう考えると、笑いの情報処理が、人間的（皮質）カイロ[f]で処理される経緯も判然とする。

（正高信男『コミュ障　動物性を失った人類』）

設問一　傍線アからエの漢字を平仮名（ひらがな）に書き換えなさい。

設問二　傍線aからfの片仮名（カタカナ）を漢字に書き換えなさい。

設問三　［　A　］～［　D　］には、どんな接続詞（つなぎことば）が入るか。次の中から最も適当と思われる語を選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ語は二度以上使わないこと。

ア　だから　　イ　それでは　　ウ　あるいは　　エ　けれども

設問四　傍線①について、「同じようなもの」を表す表現でないものはどれか。次の中から最も適当と思われるものを選び、記号で答えなさい。

ア　うり二つ　　イ　同工異曲　　ウ　五十歩百歩　　エ　竹馬の友

設問五　傍線（1）について、①「人間」と、②「人間以外の動物」にとって「励み」となるものは何か。本文中から①は十字以上十五字以内、②は五字以上十字以内でそれぞれ書き抜きなさい。

設問六　［　Ⅰ　］、［　Ⅱ　］には、どんな語句が入るか。次の中から最も適当と思われるものを選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア　報酬　　イ　経験　　ウ　学習　　エ　本能

設問七　Ⅲ　には、どんな語句が入るか。次の中から最も適当と思われるものを選び、記号で答えなさい。

ア　社会で決められた
イ　日常生活に用いる
ウ　価値判断を下す
エ　心に働きかける

設問八　傍線（2）について、「他の動物では不可能な高次の学習」は何によって始まるのか。本文中の語句を用いて三十字以内で説明しなさい。

問題二

境界領域にアプローチしようとするとき、それに近い、あるいは重なり合っている分野の研究者たちは共同研究することが多い。共同研究するとき、最初の（最後までといって良いばあいも多いが）主要な問題は、お互いの間で相手の言葉がわかるようにならなければならないことである。共同で仕事をしようとするとき、メンバー間のコミュニケーションはいつでも必要なことであるが、共同研究のばあいこのことが特に問題とされるのは、既成の分野で育った研究者によって、それぞれのアプローチの枠組、［A］問題をとらえる際の分類体系が違っているからである。

何度も会合[ア]を重ね、対話や討論を通じて、相手の言葉や分類体系がわかってくる。そのうえで今度は、共同研究のメンバーに共通の言葉や分類体系をつくっていくことができるようになる。ここでも、お互に「通い合う」ことが大切なのである。

一度だけや、他分野の人をマネ[a]いて話を聞くだけなら、自分の分類体系を詳細[①]にしたり展開するうえでのヒントやアイデアを得るだけで、新しい分類をつくることにならない。それでは共同研究にならない。自分の分類体系を押しつけたり、どこかのを借りてくるのは問題外である。それでは、宣伝・フキュウ[b]の場となり、いわば領土拡張のための越境であって、相互の理解は成立しない。

この共同研究の原則は、国際紛争や国家間問題にもあてはまる。異質文化の伝統との結合のばあいにも、同じ問題が起こる。問題の解決には、一方の分類体系をして支配させるのではなく、相互に他者の分類体系を理解することが必要条件なのである。

一つの分類体系が支配し、それが存在そのものの分類であるとして固定化されている領域（学問分野・社会組織・政党・国家・国家群・宗教・国際陣営など）の内部だけに生きている人にとっては、「わかる」とは、相手が自分と同じ分類体系をもっていることの確認であり、対象を自分の分類体系のどこかに位置づけることであり、「わかり合う」とは、相互に同じ分類体系をもっていることの相互確認であり、それ故の安心である。ヘイサ[c]社会での特徴は、「わかり方」がこのような形になっていることである。「君の気持ちはよくわかる」とか、「いまの若者は理解できない」というときの「わかる」とか「理解」は、このような意味[(1)]である。

じつは、このような理解であれば、［I］なのである。異質の分類体系を知るためにこそ、ケンカや論争や対話が必要なのであって、同一の分類体系のなかに住んでいるのなら、言葉はいらない。〝ハラとハラ〟で十分わかり合えるし、［B］が可能である。

［C］、これでは本当に「わかる」ということにならない。互いに「わかっている」、あるいは「わかり合っている」と思い込んでいるだけで、じつはわかり合っていないかも知れないのである。子供たちが「理解のある」大人に対してフシンカン[d]を抱いたり、いらいらしたりすることのなかには、「理解のある大人たち」が、ちっとも「わかっていない」のに、「わかった」ふりをしたり、「わかっている」と勝手に思い込んでいることに対する不満の表現があるかも知れないのである。

最近いかにも「ものわかりのいい」子供たちや若者たちが増えているが、わたしは彼らを見て、本当に「わかっている」とは思えない。ちっとも「［II］」のに、「わかった風」をしていると思う。それは大人の考えが本当にわかっていたり、大人のいうことにしたがおうとしているのではなく、「どうせわかり合えないのだ」と割り切って、無用な摩擦を避け、適当に「良い子」になって、生活と気分の安定をはかっているのだと思う。

親は安心するであろうが、結局は本当に「［III］」ための努力を、両方とも放棄[イ]しているのである。これはいまの子供や若者が、ずるいとか老成しているということではない。彼ら自身が少しあとの世代について同じことを感じているはずで、いまの大人が（年齢が上になるほど）、自分と同じ分類体系が通用していると［IV］のに対し、

若い人ほど実情が見えているのだと思う。

（中略）

このように、異質の分類体系が相互の理解をキョヒ[e]する形で対立し合っているとき、「わかった風」や「理解ある態度」を示すことは、かえって事態を混乱させる危険もはらんでいる。一つの分類体系に固執[ウ]している相手に、「理解ある態度」を示すことは、しばしば相手方に、「自分と同じ分類体系をもっている」と思い込ませるばあいもあるからだ。このばあい、相手方が、その態度を示した側の分類体系を理解することはもちろんない。結局は理解し合うことなく、理解していると誤解し合うだけである。

したがって、問題の解決はきわめて困難なのであるが、問題点はきわめて明白であると思う。要するに、西欧的な分類体系こそ唯一絶対のものだと信じられていた時代が去ったのである。このときこそ、思い込みの幻想に安住[エ]することなく、本当に「わかり合う」ことが重要であり、その可能性もでてきたのである。

本当に「わかる」とは、異質的な分類体系を理解することである。それは簡単に「わかった」とか「理解ある態度」を示したりできるようなものではない、長い、困難な、相互の努力、通い合うことによってはじめて可能になるような、[D]可能にはなっても、実現はきわめて困難な理解の道である。

「西欧的な分類体系こそ唯一絶対だと信じられていた時代は去った」と書いたが、だからもう欧米はダメだとか、日本的分類体系を唯一絶対にせよというのではない。百年たっても、われわれは西欧的な分類体系が「わかった」などといえないのである。[E]、いままでは、理解したと思い込んでいたケイコウ[f]が強い。本当の西欧理解はこれからなのである。それほどに、「本当にわかる」ということは困難である。

（坂本賢三『「分ける」こと「わかる」こと』）

設問一　傍線アからエの漢字を平仮名（ひらがな）に書き換えなさい。

設問二　傍線aからfの片仮名（カタカナ）を漢字に書き換えなさい。

設問三　傍線①「詳細」と熟語の構成が同じものはどれか。次の中から最も適当と思われるものを選び、記号で答えなさい。

ア　損得　　イ　近所　　ウ　豊富　　エ　登山

設問四　[A]、[C]、[D]、[E]には、どんな接続詞（つなぎことば）が入るか。次の中から最も適当と思われる語を選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ語は二度以上使わないこと。

ア　つまり　　イ　むしろ　　ウ　そして　　エ　しかし

設問五　傍線（1）「このような意味」とはどういうことか。本文中の語句を用いて二十五字以内で説明しなさい。

設問六　[I]には、どんな語句が入るか。次の中から最も適当と思われるものを選び、記号で答えなさい。

ア　対話も討論も不要
イ　なおさら言葉は必要
ウ　共同研究は不要
エ　本当にわかることが可能

設問七　[B]には、どんな語句が入るか。次の中から最も適当と思われるものを選び、記号で答えなさい。

ア　不言実行　　イ　以心伝心　　ウ　温故知新　　エ　取捨選択

設問八　[Ⅱ]～[Ⅳ]には、どんな語句が入るか。本文中から七字以内でそれぞれ書き抜きなさい。

設問九　傍線（2）「問題の解決はきわめて困難なのであるが、問題点はきわめて明白である」とは、どういうことか。次の中から最も適当と思われるものを選び、記号で答えなさい。

ア　相手の文化を理解しないまま相互理解に至るのは難しいが、時間をかけて付き合っていくことが解決につながるということはわかっている、ということ。

イ　相手のことを本当にわかるようになるのは大変なことであり、自分とは異なる分類体系があることを理解した上で、相互理解に向けての努力を要する、ということ。

ウ　きちんと理解したと思われるケースでも誤っていることはよくあるので、正しく理解するためにはお互いに何度も確認し合わなければならない、ということ。

エ　相手が「理解ある態度」を示したからといって、すぐに気を許すのではなく、少しずつ心を開いていくことでようやく相互理解に至る、ということ。